

ほんとう へいあん  
本当の平安

「神は われらの避け所 また力。  
苦しむとき そこにある強き助け。  
それゆえ われらは恐れぬ。」  
(詩篇 46篇1,2節)



アメリカのとある町でのこと。その町の美術館では、毎年恒例の絵画展が開かれました。その年のテーマは「平安」です。そして、このテーマにふさわしい多くの作品が集まり、展示されました。最終日には審査員たちによって、受賞作品を決める投票が行われ、2つの絵が最後の審査に残りました。その一つは、静かな夜の湖の絵です。森の中の湖の上に月の光が反射して、波一つない鏡のような美しい湖です。しかし、最優秀作品に選ばれたのは、もう一つの方でした。そして多くの人がその受賞に驚いたのです。なぜなら、それは、嵐にさらされる岸壁の絵でした。暗雲立ち込める暗い空、天を切り裂く稲妻、海岸の岸壁に打ち付ける荒波。一見すると「平安」とはほど遠い作風です。しかし良く見ると、岸壁の中ほどの小さなくぼみに、鳥の巣が設けられていて、雛を抱えて風をやり過ごす母鳥の姿がありました。鳥たちにとって、そこは確かに最も安全な場所です。この絵には「嵐のただ中にある平安」という題が付けられていました。

わたし じんせい せいしょ つぎ  
さて、私たちの人生はどのようなものでしょうか？ 聖書には次のよ  
うにあります。

わたし よわい ななじゅうねん  
「私たちの年齢は七十年。  
すこ はちじゅうねん  
健やかであっても八十年。

そのほとんどは労苦とわざわいです。」  
しへん べん せつ  
(詩篇90篇10節)



ひと め み  
「人の目にはまっすぐに見えるが、  
おわりのし みち  
その終わりが死となる道がある。」  
しんげん しょう せつ  
(箴言14章12節)

にんげん いちどし しご う さだ  
「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まって  
いる…」  
じん てがみ しょう せつ  
(ヘブル人への手紙9章27節)

ろうく し わたし じんせい あらし なか  
労苦とわざわい、死とさばき…私たちの人生は、まさに嵐の中を  
とお わたし ひつよう へいあん たん  
通っていくようなものです。ですから、私たちに必要な平安は、単  
おだ あらし なか あんしん  
る穏やかさではなく、嵐のただ中にある、安心していただけるもの  
でなければならぬのです。

へんあん て い  
では、どうすればこの「平安」を手に入れることができるのでし  
うか？ それは神の与えてくださる救いを受け入れることです。イエス・  
すくぬし しん う い かみ た かえ かみ  
キリストを救い主として信じ受け入れてまことの神に立ち返り、神から  
つみ ゆる えいえん え  
罪の赦しと永遠のいのちを得ることです。

せ かい わたし にんげん そうぞうしゅ かみ つく  
この世界も、私たち人間も、創造主である神によって造られました。  
にんげん かみ あい たいしよう とおと もくてき つく  
しかも人間は「神の愛の対象」という尊い目的で造られたのです。  
さいしょ にんげん かみ けいこく さか つみ おか  
しかし、最初の人間であるアダムが神の警告に逆らって罪を犯した  
ため、その子孫である私たちも神に逆らう性質(=罪)を持って生  
もの かみ かんしゃ にんげん かって つく  
きる者となりました。そのため、神への感謝もなく、人間が勝手に作  
だ にせもの かみ め さき のぞ ねが いか あらそ かいらく  
り出した偽物の神に目先の望みを願い、うそ、怒り、争い、快樂、  
ぼうりよく おお あく おこな い  
暴力など多くの悪を行って生きています。

それでも、<sup>ろうく</sup>労苦は絶えず、しかも死ぬ<sup>し</sup>時<sup>とき</sup>にはこの世<sup>よ</sup>で得<sup>え</sup>た全<sup>すべ</sup>てのものを手放<sup>てばな</sup>して死<sup>し</sup>ななければなりません。そして死後<sup>しご</sup>には、きよく正<sup>ただ</sup>しい神<sup>かみ</sup>から、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>が犯<sup>おか</sup>した全<sup>すべ</sup>ての罪<sup>つみ</sup>に対する刑罰<sup>たいけいばつ</sup>を受けて、地獄<sup>じごく</sup>で永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>に苦<sup>くる</sup>しみ続<sup>つづ</sup>けなければならぬのです。これが、私<sup>わたし</sup>たちの人<sup>じん</sup>生<sup>せい</sup>が嵐<sup>あらし</sup>のようになっ<sup>げんいん</sup>てしまっ<sup>けつ</sup>た原因<sup>げんいん</sup>と結果<sup>けつ</sup>です。



神<sup>かみ</sup>は、このよう<sup>にんげん</sup>な人間<sup>にんげん</sup>を、その罪<sup>つみ</sup>深<sup>ぶか</sup>さ以上<sup>いじょう</sup>の深<sup>ふか</sup>い愛<sup>あい</sup>で愛<sup>あい</sup>してくださ<sup>さい</sup>り、救<sup>すく</sup>いを与<sup>あた</sup>えてくださ<sup>さい</sup>いました。最<sup>さい</sup>愛<sup>あい</sup>の御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>イエス・キリストをこの世<sup>よ</sup>に遣<sup>つか</sup>わされたのです。



イエス・キリストは、<sup>みな</sup>皆<sup>みな</sup>さまのすべ<sup>つみ</sup>ての罪<sup>せ</sup>を背<sup>お</sup>負<sup>お</sup>って十<sup>じゅう</sup>字<sup>じ</sup>架<sup>か</sup>にかかり、<sup>みな</sup>皆<sup>みな</sup>さまが受<sup>う</sup>けるべき罪<sup>つみ</sup>の刑罰<sup>けいばつ</sup>を身代<sup>み</sup>わり<sup>が</sup>に受<sup>う</sup>けて死<sup>し</sup>んで下<sup>くだ</sup>さいました。そして、死<sup>し</sup>後<sup>ご</sup>三<sup>みつ</sup>日<sup>か</sup>目<sup>め</sup>には死<sup>し</sup>を打<sup>う</sup>ち破<sup>やぶ</sup>つ

てよみがえられたのです。

ですから誰<sup>だれ</sup>でもイエス・キリストを信<sup>しん</sup>じるなら、罪<sup>つみ</sup>がすべ<sup>ゆる</sup>て赦<sup>ゆる</sup>されて、死<sup>し</sup>後<sup>ご</sup>の刑罰<sup>けいばつ</sup>から救<sup>すく</sup>われます。死<sup>し</sup>後<sup>ご</sup>、地獄<sup>じごく</sup>ではなく永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>の天<sup>てん</sup>国<sup>こく</sup>に行<sup>い</sup>くことができ<sup>すく</sup>るのです。この救<sup>すく</sup>いが与<sup>あた</sup>えられたなら、死<sup>し</sup>の恐<sup>きょう</sup>怖<sup>ふ</sup>に打<sup>う</sup>ち勝<sup>か</sup>つ平<sup>へい</sup>安<sup>あん</sup>を持<sup>も</sup>つことができ<sup>かみ</sup>ます。さら<sup>かみ</sup>に、神<sup>かみ</sup>に立<sup>た</sup>ち返<sup>かえ</sup>ったことによ<sup>かみ</sup>って、神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>守<sup>まも</sup>りの内<sup>うち</sup>に歩<sup>あゆ</sup>むとい<sup>ゆ</sup>う揺<sup>ゆ</sup>るがな<sup>へい</sup>い平<sup>へい</sup>安<sup>あん</sup>を持<sup>も</sup>って生<sup>い</sup>きるこ<sup>い</sup>ろがで<sup>き</sup>るのです。

ぜ<sup>みな</sup>び、皆<sup>みな</sup>さまもイエス・キリストを信<sup>しん</sup>じて神<sup>かみ</sup>に立<sup>かえ</sup>ち返<sup>かえ</sup>られ、救<sup>すく</sup>いに与<sup>あず</sup>かり、人<sup>じん</sup>生<sup>せい</sup>の嵐<sup>あらし</sup>の中<sup>なか</sup>でも揺<sup>ゆ</sup>るがな<sup>ほん</sup>い本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>の平<sup>へい</sup>安<sup>あん</sup>を得<sup>え</sup>てください。

